HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

| | |
|---|---|
| タイトル | 平川唯一「英語会話」テキストの分析 ― 後のラジオ講座を踏まえて ― |
| 著者 | 柾木，貴之；MASAKI，Takayuki |
| 引用 | 年報新人文学(18)：105(1)-60(46) |
| 発行日 | 2021-12-25 |

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

［論文］

# 平川唯一「英語会話」テキストの分析

## ―後のラジオ講座を踏まえて―

柾木 貴之

## １．はじめに

2021 年 11 月 1 日に NHK で連続テレビ小説「カムカムエヴリバディ」の放映が開始された。これは三人のヒロインとラジオ英語講座を巡る百年の物語である。題名となった「カムカムエヴリバディ」の由来は，1946 年 2 月 1 日に NHK で開始されたラジオ英語講座「英語会話」にある。講師の平川唯一は番組開始時に流れるテーマソングとして「証城寺の狸囃子」を選び, 冒頭に「come, come, everybody」という英語歌詞をつけた。これが「カムカムエヴリバディ」の由来である。

平川の「英語会話」は百万人以上の聴取者を獲得し，社会現象となったにもかかわらず，英語教育の分野において先行研究が豊富にあるとは言えない。以下では先行研究を大きく三つに分類して概観する。一つ目は伝記的研究である。2010 年代までその主な研究は，平川唯一の次男・洌による『カムカムエヴリ

バディ―平川唯一と「カムカム英語」の時代』(1995) であったが，2021 年 11 月の番組開始を受け，同書が平川（2021a）として復刊し，巻末には新しい資料として「NHK ラジオ英語講座略年表」が付された。さらには, 平川（2021a）には含まない情報を含む一般書として，平川（2021b）も刊行となり，伝記的研究はさらに充実することになった。

二つ目はメディア研究である。この種の研究の代表としては，山口誠『英語講座の誕生―メディアと教養が出会う近代日本』(2001) と宇佐美昇三「英語教育番組略史―大正 14 年から昭和 54 年まで」(1980) を挙げることができる。前者ではメディア研究を専門とする山口が，戦前において英語講座の果たした役割を分析している。後者では NHK 総合放送文化研究所主任研究員であった宇佐美が，1925 年のラジオ放送開始から 1979 年までの英語講座の変遷を記述している。

三つ目は英語教育の分野における歴史的研究である[1]。この例は，紀平健一「『カムカム英語』―戦後『英会話』の原型」(1995)，斎藤兆史『日本人と英語―もうひとつの英語百年史』(2007)，江利川春雄『英語と日本軍―知られざる外国語教育史』(2016) の三点である。紀平（1995）は戦後に訪れた英会話ブームの原型を平川の「英語会話」に求め，その内容について考察している。斎藤（2007）は平川唯一『英語会話』NO.36 から英文を引用し，その特徴を分析している。江利川（2016）は戦後まもなくの英語教育について記述する中で，平川の「英語会話」を取り上げ，その影響を論じている。

以上が主要な先行研究であるが，これらの研究には十分ではない点が二つある。一つは「英語会話」テキスト全 54 号を対象に分析を行った研究は確認できないという点である。これまでの研究はテキストの分析を行わないか，行っても一号か数号を取り上げるのみ，という状況になっている。これではテキストの全体的特徴は見えてこない。もう一つは平川の「英語会話」テキストの分

析を行った上で，後のテキストと比較検討を行った研究はほとんどないという点である[2]。この状況では，平川のテキストが後のテキストとどのような類似点・相違点を有するかが不明瞭なままである。

このような先行研究の課題を踏まえ，本論文の目的は，全54号を精読した上で，平川唯一「英語会話」テキストについて分析することである。その際は，平川以後のテキストについても分析を行うことで，それが平川のテキストのどのような点を踏襲したと考えられるか，また，どのような点が新しい要素と言えるか，の二点について考察を行いたい。

以下ではまず２節で平川唯一の経歴についてまとめる。３節では戦前のラジオ講座について概説した後，平川唯一の方法論を踏まえた上で,「英語会話」テキストの分析を行う。そして，番組の反響，背景，流行した理由，代表的な批判，についても記述する。４節では前節までの考察に基づき，平川以後のテキストについて分析する。最後に５節でまとめを行い，論文全体を締めくくる。

なお，本論文は「英語会話」テキストの分析に重点を置き，それが実際，教育効果を上げたかについては，考察を行わないこととする。その理由は，英語力が向上したかどうかの検証は，現在となっては困難だからである。もちろん，受講生の声は残っており，それは本論文でも取り上げる。しかし，仮に「英語会話」により英語力が向上したという受講生がいたとしても，学習者の実感と実際の言語能力の伸びは必ずしも一致しない。また学校の英語授業などの，他の要因を排除することはできない[3]。以上の理由により，本論文はテキストの分析に主眼を置くことをあらかじめ断っておきたい。

## 2．平川唯一の経歴

まずは平川唯一の略歴を以下にまとめた。

| | |
|---|---|
| 1902（明治35）年 | 岡山県上房郡津川村に生まれる |
| 1916（大正５）年 | 津川尋常小学校高等科を卒業，家業の農業を継ぐ |
| 1918（大正７）年 | 16歳のとき，アメリカに出稼ぎに行っていた父を追って渡米 |
| 1919（大正８）年 | 17歳のとき，シアトルの小学校スワード・スクールに入学 |
| 1922（大正11）年 | ６月，飛び級により，スワード・スクールを卒業 |
| | ９月，20歳でシアトルのブロードウェイ・ハイスクールに入学 |
| 1926（大正15）年 | ６月，ブロードウェイ・ハイスクールを卒業 |
| | 10月，ワシントン州立大学に入学 |
| | ２年生のときに専攻を物理学から演劇科に変更する |
| 1931（昭和６）年 | ６月，ワシントン州立大学を卒業 |
| 1932（昭和７）年 | リトル・トウキョウ劇団の専任監督となり日英両語劇の指導に当たる |
| | このころ俳優Joe Hirakawaとしてハリウッド映画に出演 |
| | ロサンゼルスのセントメリーズ・チャーチ（聖公会）の専任教師となる |
| 1935（昭和10）年 | 聖公会で出会った滝田よねと結婚 |
| 1937（昭和12）年 | 帰国。NHKに採用され，国際課のラジオアナウンサーとして勤務 |
| 1941（昭和16）年 | 日米開戦となる |
| 1945（昭和20）年 | 終戦の詔勅（玉音放送）の英語放送を担当 |
| 1946（昭和21）年 | ２月，NHKラジオ第一放送で「英語会話」を開始 |
| | 主に午後６時から15分間放送される |
| 1951（昭和26）年 | ２月でNHKでの放送を終了 |
| | 12月から「カムカム英語」として民放各局で放送が始まる |
| 1955（昭和30）年 | 「カムカム英語」放送終了 |
| 1957（昭和32）年 | 太平洋テレビジョンに迎えられる。翻訳部長を経て副社長就任 |
| 1965（昭和40）年 | 太平洋テレビジョンを63歳で定年退職 |
| 1986（昭和61）年 | 『カムカム英語』（名著普及会）出版 |
| 1993（平成５）年 | 91歳で死去 |

**表１　平川唯一の略歴（平川 2021a,b をもとに執筆者作成）**

経歴の中で特徴的なのは 19 年に及ぶアメリカ生活である。岡山県上房郡

津川村に生まれた平川は小学校高等科を卒業後，中学校には進学しなかった。1915 年において，中等教育進学率は 8.1％で（文部省 1962：39），中学校で英語を学習できたのは一部の子弟だけであった。平川は日本で英語を学ぶことはないまま，1918 年，アメリカの土を踏むことになる。

後に「英語会話」を担当する上で，重要な経験になった事柄を平川は二つ挙げている。一つはアメリカの小学校で，小学生と一緒に英語を学んだ経験である。

> 小学校の三年間に，小さい同級のアメリカの子供達と遊びながら，聞き覚えや口真似で身につけた，生きた英語が，やがて何年か後になって，あのカムカム英語の放送を実際にやる場合に，大いに役立つ事になったわけです。
>
> もし，この赤ちゃんみたいな段階をすっ飛ばしたり，かけ足で通り過ぎたりしていたとすれば，むずかしい勉強英語の方は何とか出来たとしても，簡単な日常会話が，どうもうまく行かない，といった結果に終ったかも知れません。(平川 1979：175)

平川は英語を「口真似で身につけた」経験を「赤ちゃんみたいな段階」と呼んでいる。これは後に平川が「英語会話」を担当する上で，大きな経験となった。というのも，平川は自身の「英語会話」の聴取者を「赤ちゃん」と呼び，難しい理屈はなしに，とにかく自身の英語を口真似することを推奨したからである。アメリカの小学校における「赤ちゃん経験」が後に平川の方法論の根幹となる。

もう一つは大学で演劇科に所属し，標準英語を学んだ経験である。平川はワシントン州立大学で当初，物理学を専攻したが，ほどなくして演劇科に転科した。そこでの経験を以下のように振り返っている。

物理学の専攻ではカムカム放送には何のたしにもならなかった訳なんですが，演劇科の方ですと，例えば「発音学」なんかが必修科目になっておりまして，此処ではまったく「なまり発音」のない，完全な標準英語の訓練が受けられるわけです。(中略)

それからまた，演劇科では当然の事ながら，劇の脚本を書く技術も教わる訳ですが，これがまた会話放送のテキストを書きおろす場合にそのまま応用出来て，大いに助かったように思われます。つまり，二人で話し合う会話の内容にしましても，そこに劇的な要素が入っていると，より楽しくなるわけですね。(平川 1979：179-180)

上で平川が挙げているのは，標準英語の発音訓練と英語脚本の執筆訓練である。NHK でラジオ英語講座を担当する場合，その英語にはなまりがないことが求められる。平川はそのような標準英語を演劇科で習ったのである。また戦前のラジオ英語講座からの伝統で，放送にはテキストが存在する。平川はテキストを執筆する技術を演劇科で学んだのである。このようにして 19 年間にわたるアメリカ生活は,「英語会話の平川唯一」を形作る上で，大きな役割を果たした。

## ３．平川唯一「英語会話」

### ３．１　「英語会話」前史

平川唯一「英語会話」について分析する前に，平川以前のラジオ英語講座の状況について概説したい。まずは以下の略年表を参照してほしい。

| | |
|---|---|
| 1925（大正14）年 | ラジオ放送開始，岡倉由三郎ほか「英語講座」開始 |
| 1933（昭和8）年 | 岡倉由三郎「基礎英語講座」開始 |
| 1935（昭和10）年 | 「英語会話講座」開始 |
| 1938（昭和13）年 | 「実用英語会話」開始 |
| | 堀英四郎「基礎英語講座」 |
| 1941（昭和16）年 | 日米開戦に伴いラジオ第二放送は休止 |
| 1945（昭和20）年 | 堀英四郎「基礎英語講座」再開 |
| | 「英語会話」「実用英語会話」再開 |

**表２　平川唯一以前のラジオ英語講座（宇佐美 1980 をもとに執筆者作成）**

**図１　岡倉由三郎『春期 基礎英語』（1933）**

**図２　堀英四郎『春期 基礎英語』（1939）**

NHK のラジオ英語講座が始まったのは，ラジオ放送が開始になった 1925 年である。これは日本の歴史上，初めての試みであったが，最初期のラジオ英語講座に大きな貢献をしたのは岡倉由三郎である。岡倉は 1896 年から 1925 年まで東京高等師範学校教授を務めた研究者で，当時の英語教育界の中心的人物であった。岡倉は 1925 年に「英語講座」を，1926 年から 1932 年まで「英語講座―初等科」を，1933 年から 1936 年まで「基礎英語講座」を担当し（図１），

人気講師となった。1936 年 2 月に岡倉が病に倒れると,「基礎英語講座」は塩谷栄に引き継がれ，1938 年からは堀英四郎が担当した（図２）。

一方,「英語会話講座」が開始になったのは 1935 年のことである[4]。これは講義形式の「基礎英語講座」とは異なり，二人の講師による会話形式であった。講師は毎年異なり，初年度の担当は前半が T. ライエルと萩原恭平，後半がグレン･ショーと W. ショーであった。「英語会話講座」は 1938 年に「実用英語会話」に改称された後，翌 1939 年 9 月にドイツがイギリスと開戦すると，休止になった。その後も，堀の「基礎英語講座」だけは継続し，1941 年 12 月 8 日の真珠湾攻撃の朝まで続いたが，同日をもってついに休止となった。

戦後，ラジオ英語講座の再開は早かった。1945 年 9 月 18 日には「実用英語会話」が，10 月 1 日には「英語会話」が，11 月 1 日には「基礎英語講座」が開始となったが，間もなく「英語会話」の講師として白羽の矢が立つことになったのが平川唯一である。その背景について，宇佐美昇三は「すでに NHK では堀英四郎の『基礎英語講座』や, 杉山ハリスと西内正丸の『実用英語会話』, J.A. サージェントの『英語会話』を放送していた。しかし，道をたずねるとか紹介といった会話教材では，いずれも 1 か月くらいで種切れとなり，なにかハウ・ツーでない会話番組が部内で要望されていた」(宇佐美 1982：97-98) と振り返っている。この「ハウ・ツーでない会話番組」への要望に応える形で登場したのが平川であった。

### ３．２　平川唯一「英語会話」の概要

まずは平川唯一「英語会話」に関する基本的な情報を整理した。

・期間　NHK「英語会話」：1946年２月～1951年２月
　　民放「カムカム英語」：1951年12月～1955年７月

・時間　月～金，主に午後６時～，毎回15分

・テーマソング：「証城寺の狸囃子」にのせた英語の歌
・テキスト：月１回発行

### ３．２．１　方法論

平川の「英語会話」は 1946 年２月１日に始まった。これはまだ敗戦から半年も経っていない時期のことである。平川は番組を始めた当時の意識について，「戦後の日本を明るくしたい――ただ英語の勉強というのみでなく，こういう考えからカムカム英語は誕生したのです」(平川 2021a：20) と述べている。「日本を明るくしたい」という意識から，平川は番組にテーマソングを設けることにした。当時，テーマソングのあるラジオ番組は珍しかったが，これが番組に親しみをもたらす上で大きな役割を果たした。平川は日本の童謡「証城寺の狸囃子」に英語の歌詞をつけ，番組の開始時に流した。

こうして始まった第１回放送で，平川唯一は英語学習法を以下のように説明している。

> 第一は，苦い顔の努力や勉強はやめて，英語をやたらにもてあそぶこと。第二は，赤ちゃんになったつもりで，講師の発音や言葉の調子をまねること。第三はなるべく一家そろって，この英会話の時間に参加していただくこと。第四は，恥ずかしいとか，間が悪いとかいう気持ちを完全に捨てて，習った言葉を家庭で実際に使うこと。第五は，片言でも日本語交じりでもよいから，考え込まないで，とにかく英語の形で会話を運ぶこと。(平川 2021a：13)

五つの方法のうち，注目すべきは第二の「赤ちゃんになったつもりで，講師の発音や言葉の調子をまねること」である。上述したように，これは平川自身

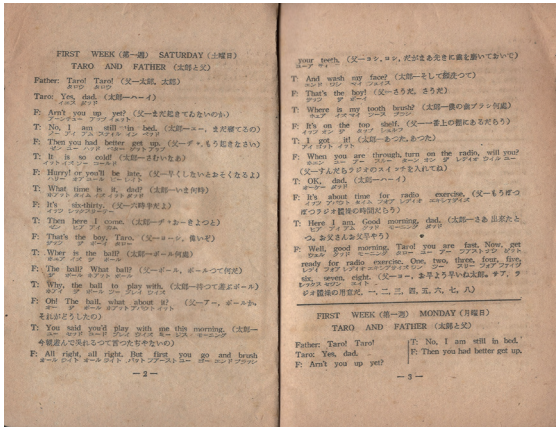
がアメリカの小学校で英語を学んだ際，実践した方法である。このシンプルな方法論が平川の「英語会話」の特徴であった。

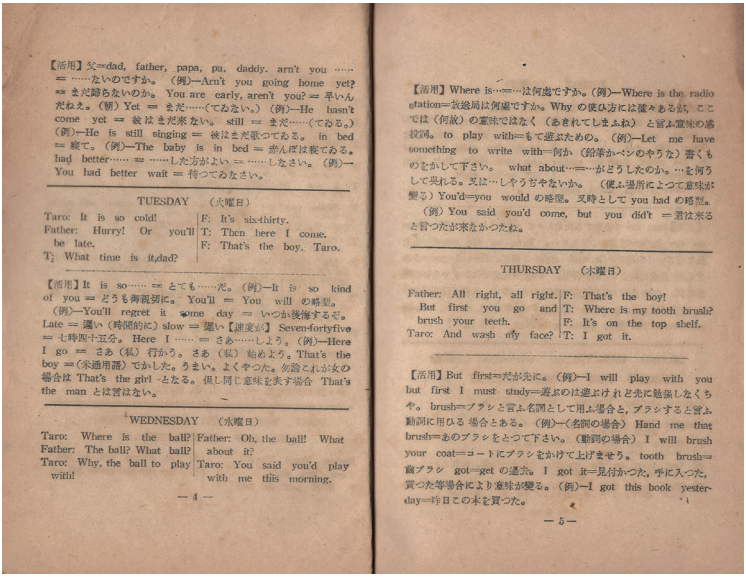
### ３．２．２　テキスト

では，テキストはどのようなものだったのだろうか。上で示したように，平川の担当したラジオ英語講座には，NHK の「英語会話」と民放の「カムカム英語」がある。以下では全テキストを確認できた「英語会話」を分析の対象とする。分析の項目は構成，内容，英語の特徴，の三点である。分析に用いたのは，全 54 号の復刻版テキストを収録した平川・日本放送協会（1986）である。テキストの実物を入手できた号のいくつかについては，適宜画像を掲載して説明の補助としていく。

#### 構成

最初にテキストの構成について分析を行う。以下に掲載したのは『英語会話』NO. 1（第１巻第１号）の表紙と冒頭の４頁である。





【活用】父=dad, father, papa, pa, daddy. arn't you …… = ……ないのですか。（例）—Arn't you going home yet? = まだ歸らないのか。You are early, aren't you? = 早いんだねえ。（朝）Yet = まだ……（てゐない。）（例）—He hasn't come yet = 彼はまだ來ない。still = まだ……（てゐる。）（例）—He is still singing = 彼はまだ歌つてゐる。in bed = 寢て。（例）—The baby is in bed = 赤んぼは寢てゐる。had better…… = ……した方がよい = ……しなさい。（例）—You had better wait = 待つてゐなさい。

TUESDAY （火曜日）

Taro: It is so cold!
Father: Hurry! Or you'll be late.
T: What time is it,dad?
F: It's six-thirty.
T: Then here I come.
F: That's the boy, Taro.

【活用】It is so…… = とても……だ。（例）—It is so kind of you = どうも御親切に。You'll = You will の略型。（例）—You'll regret it some day = いつか後悔するぞ。Late = 遲い（時間的に）slow = 遲い【速度が】Seven-fortyfive = 七時四十五分。Here I …… = さあ……しよう。（例）—Here I go = さあ（私）行かう。さあ（私）始めよう。That's the boy = （米通用語）でかした。うまい。よくやつた。勿論これが女の場合は That's the girl -となる。但し同じ意味を表す場合 That's the man とは言はない。

WEDNESDAY （水曜日）

Taro: Where is the ball?
Father: The ball? What ball?
Taro: Why, the ball to play with!
Father: Oh, the ball! What about it?
Taro: You said you'd play with me this morning.

— 4 —

【活用】Where is…=…は何處ですか。（例）—Where is the radio station=放送局は何處ですか。Why の使ひ方には種々あるが，ここでは（何故）の意味ではなく（あきれてしまふね）と言ふ意味の感投詞。to play with=もて遊ぶための。（例）—Let me have something to write with=何か（鉛筆かペンのやうな）書くものをかして下さい。what about…=…がどうしたのか。…を何うして呉れる。又は…しやうぢやないか。（使ふ場所によつて意味が變る）You'd=you would の略型。又時として you had の略型。（例）You said you'd come, but you did't = 君は來ると言つたが來なかつたね。

THURSDAY （木曜日）

Father: All right, all right. But first you go and brush your teeth.
Taro: And wash my face?
F: That's the boy!
T: Where is my tooth brush?
F: It's on the top shelf.
T: I got it.

【活用】But first=だが先に。（例）—I will play with you but first I must study=遊ぶのは遊ぶけれど先に勉强しなくちや。brush=ブラシと言ふ名詞として用ふ場合と，ブラシすると言ふ動詞に用ひる場合とある。（例）—（名詞の場合）Hand me that brush=あのブラシをとつて下さい。（動詞の場合）I will brush your coat=コートにブラシをかけて上げませう。tooth brush=齒ブラシ got=get の過去。I got it=見付かつた，手に入つた，買つた等場合により意味が變る。（例）—I got this book yesterday=昨日この本を買つた。

— 5 —

図３　平川唯一『英語会話』NO.1（第１巻第１号）

表紙にはNO. 1とある。平川・日本放送協会（1986）を参照すると，これは年度が変わると第１号に戻る書誌情報としての号数ではなく，テキストの通算号数になっている。書誌情報としての巻号が，表紙に併記されるようになるのはNO.23（第３巻第５号）からである。以下では書誌情報としての巻号と区別するため，通算号数は表紙と同様に,「NO. ○」と表記する。

NO. 1の構成を見ていくと，最初にあるのは「FIRST WEEK（第一週）」の英文全文である。題は「TARO AND FATHER（太郎と父）」となっている。英文には右に日本語訳が付いており，下にはカタカナで発音が付されている。次に,「MONDAY（月曜日）」という見出しのもと，英文全文から月曜日に扱う英文が抜粋され,【活用】の欄が続く。この【活用】欄は語注にあたるものである。そして火水木金と, この「英文＋【活用】」の構成が繰り返される。さらに,

第２週以降は第１週の構成の繰り返しとなる。

この構成は最終号にあたる NO.54 まで変わらなかった。例えば,『英語会話』NO.36（第４巻第６号）は以下のようになっている。

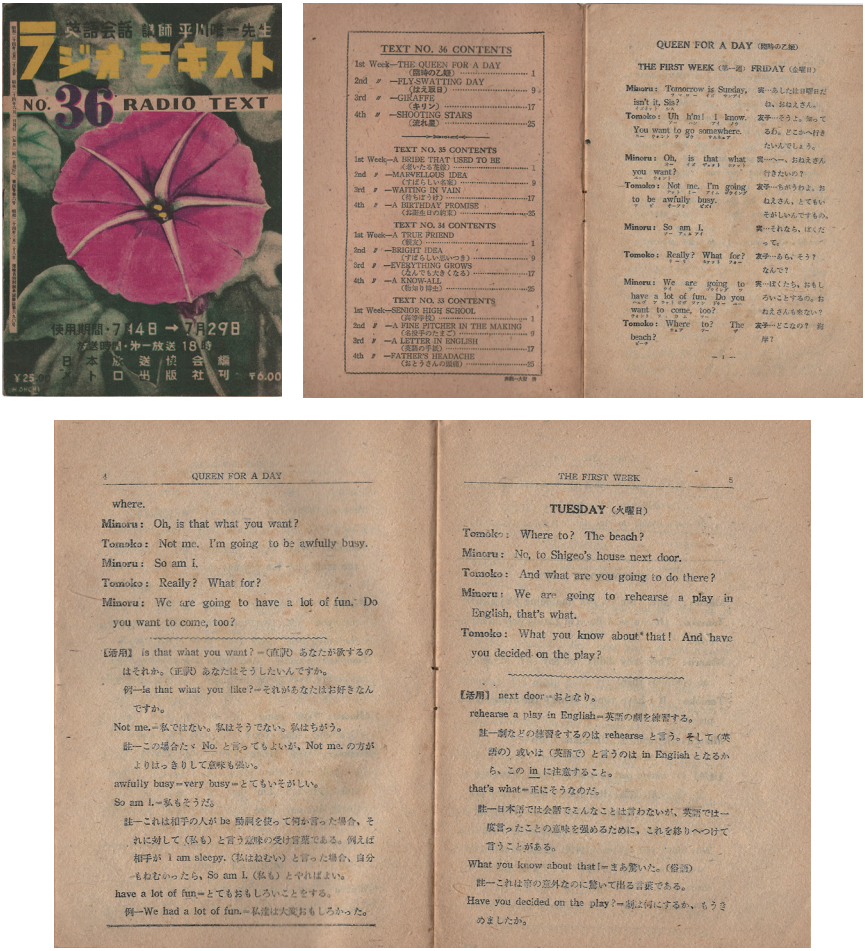



図４　平川唯一『英語会話』NO.36（第４巻第６号）

以上よりテキストの構成についてまとめると次のようになる。全 54 号のうち 44 号が 4 週分の英文を収録していることから，4 週のテキストを例とした[5]。

| |
|---|
| 第1週の英文全文+訳 |
| 　月曜日の英文+【活用】　→　火水木金も同じ構成 |
| 第2週の英文全文+訳 |
| 　月曜日の英文+【活用】　→　火水木金も同じ構成 |
| 第3週の英文全文+訳 |
| 　月曜日の英文+【活用】　→　火水木金も同じ構成 |
| 第4週の英文全文+訳 |
| 　月曜日の英文+【活用】　→　火水木金も同じ構成 |

**表 3　平川唯一「英語会話」テキストの構成**

上が基本的構成であるが，NO.14 から一つの変化がある。それはテキストに「質問箱」という欄が加わることである。これは平川が読者から寄せられた質問に答える欄である。質問はテキストに関連したものが多いが，中には外国の事物一般に関するものもあった。実際，NO.14 に初めて掲載された質問は以下のようになっている。

次は何を意味するのですか（NHK のニュース放送より）

1：ロンドン放送ラジオプレス

2：ニューヨーク発 U.P. 共同

3：サンフランシスコ発 A.P. 共同

4：モスクワ発ロイター共同

5：BBC 放送ラジオプレス

6：C.I.O.　A.F.L.　（NO.14）

この質問に対して，平川は一つ一つがどういうものか丁寧に回答している。また NO.24 では,「わたくしは英国式の発音にするかアメリカ式の発音にするか迷っています」という質問が寄せられた。これに対しては,「発音は日本語の場合でも同じように地方によって多少の違いがあるのは事実ですが，どちらが正しくってどちらが悪いとは言えないものです。(中略）アメリカ人と話す時にはアメリカ式発音と話術を使い，英国人と話す時には英国式の発音と話術を使うくらいのところまで行くのが理想だと思います」と回答している。アメリカ英語全盛の時期にあって，平川のバランス感覚を知ることのできる回答である。

この「質問箱」欄もまた最終号の NO.54 まで続き，聴取者とのコミュニケーションの場となった。テキストに関連した質問については，テキストの英語を分析する際，あらためて扱うこととする。

英文の内容

次に英文の内容と【活用】の内容について分析を行う。その際,「NO. ○の第◇週の英文」は「NO. ○ - ◇」のように表記する。

まず英文の内容について見ていくと，全 54 号の文章数は合計で 211 になる[6]。このうち英文の種類の内訳は，会話文が 204，それ以外の英文が 7 となっている。7 つの英文の題を挙げると,「A Monologue（ひとりごと）」が 3（NO.8-4, NO.9-3, NO.13-2),「A Letter to Saburo（三郎君への手紙）」(NO.11-2),「Tomoko's Diary（朋子ちゃんの日記）」(NO.13-5),「Dictation Picture（絵遊び）」(NO.19-4),「Baseball（野球）」(NO.21-3）である。このうち,（ひとりごと）は語り手が動物に対して独り言を言う内容,（絵遊び）はある絵を描く手順を説明した内容,（野球）はある野球の試合を実況する内容，となっている。

会話文の特徴は三つある。一つ目は 204 のうち 188 が日本人同士の会話になっている点である。全 211 話のうち 188 というのは 89％，約 9 割である。外国

人の登場する話はわずか９しかない[7]。平川以降の「英語会話」テキストは，外国人の登場する会話がほとんどになることを踏まえると，日本人同士の会話がテキストの９割を占めるという点が，平川のテキストの特徴となっている。

二つ目は残る７つの会話文が，人間ではなく動物の会話となっている点である。その内容は，Frog 一家の会話（NO.17-2，NO.26-3，NO.28-2,3），Fox と Badger の会話（NO.24-4），Wild-goose と Swallow の会話（NO.27-3），Hare と Tortoise の会話（NO.30-2），Snowman と Puppy の会話（NO.30-3）である。これは数としては少ないが，物語性のある印象的な内容となっている。このうち，「Changing Times（時代はうつる）」と題された Fox と Badger の会話冒頭は以下のようになっている。英文の右に付された訳とともに引用する。

| | |
|---|---|
| Fox：Now, Mr. Badger, I have a big favor to ask of you. | きつね…ときにたぬきさん，一つおり入ってお願いがあるんですが。 |
| Badger：Why, Mr. Fox! How can a plain badger like me do a favor for a big shot like you? | たぬき…これはこれはきつねさん，あなたともあろう者がわたくしのようなたぬきふぜいにお願いとは。 |
| Fox：Come, Mr. Badger. You are always so modest. | きつね…たぬきさん，いつに変らず御けんそんですね。 |
| Badger：And what can I do for you, sir? | たぬき…してその御用件は。 |
| Fox：Well, you see, my second daughter is going to be married on the twentieth. | きつね…ほかでもないんですが，わたくしの次女がこの二十日に嫁入りいたしますので。 |
| | (NO.24-4) |

上の会話から，この話は日本の「狐の嫁入り」を踏まえた内容であることが

わかる。この後，Fox から「時代は変わった，娘は嫁入り道具にたんすなんかいらない, 全波受信機が欲しいと言っている」という打ち明け話が続く。そして，Badger に「娘の結婚式で音楽を演奏してくれないか」とお願いする内容になっている。冒頭の皮肉な口調から，当時の最新電化製品が登場する意外性，話の結末まで，聴取者の関心を引き付ける展開である。演劇科で脚本作成の訓練を受けた平川の経験が活きた内容と言える。

三つ目は会話文の話題に，日本の事物と外国の事物が織り交ぜられている点である。例えば，前者の例としては,「Karuta-Kai（かるた会）」(NO.1-4),「Doll Festival（雛祭）」(NO.2-1),「Firefly-Chasing（蛍狩り）」(NO.14-1),「The Queen for a Day（臨時の乙姫）」(NO.36-1),「A Gift of Mushrooms（松たけの贈物）」(NO.51-2）などがある。一方，後者の例は,「April-Fool（四月ばか）」(NO.12-1),「Christmas-Basket（クリスマスのお祝かご）」(NO.18-1),「Seeing Hollywood in Three Minutes（三分間でホリーウッド見物）」(NO.20-4),「The Nobel Prize（ノーベル賞）」(NO.43-1),「A Red Cross Nurse（赤十字看護婦）」(NO.43-2）などである。これらの話題を通して，学習者は慣れ親しんだ日本の事物を通して英語を学びながら，同時に欧米の事物について学ぶことが可能になる。

【活用】の内容

続いて,【活用】の内容について見ていくと，上述したように，これは基本的には語注にあたるものである。ただし,「活用」という名称に現れているように，習った表現を実際の会話で活用しようとする際の注意点が随所に記されており，発信を意識した内容となっている。例えば,「Round the Corner（まがりかどで）」(NO.20-2）と題する英文は先生と Kimiko の会話となっているが,【活用】には以下のような説明がある。

日本語では（安部先生）などと言うが，英語ではそれを Teacher Abe とは言わない。先生でも普通の人と同様 Mr. Mrs. Miss. などの敬称をつけて呼ぶ。(NO.20-2)

平川の【活用】の特徴は，テキストの後の号で同じ表現が出て来た場合，同趣旨の説明をあらためて繰り返すことである。上の例だと,「My Favorite Song（大好きな歌）」(NO.26-1) という英文に再び先生が登場する。そこで平川は【活用】で再度注意を促す[8]。

日本語では何々先生あるいは先生というが，英語でいう teacher は職業としての先生の意味で，敬称の意味はない。したがって先生に呼びかける時にはいつも Miss.—Mrs.—Mr.—などという敬称をつけて普通の人と同じ呼び方をする。日本語で先生というからといって，それを直訳して teacher とやっても，それはいきた英語にはならない。(NO.26-1)

この teacher という呼びかけは，過去・現在を問わず，日本人学習者が頻繁に犯す誤りとして知られる。例えば，現代の英語教室を参観する機会の多い，英語教育学者の鳥飼玖美子は,「小学校で，子どもたちに『先生のことは Teacher! と呼びましょう』と教え，何度も大きな声で呼ばせているのを見たことがある。あれでは英語を教えたことにならない。英語では，teacher は単なる普通名詞で，呼びかけには使わないからだ」(鳥飼 2021: 331) と述べている。平川はこの 70 年以上前に，同じ注意を繰り返していたことになる。発信を前提に，正しい英語表現を定着させることを意図した工夫と言える。

英語の特徴

テキストの英語について教育的な観点から分析を行うと，特徴は二つある。一つは全 54 号で難易度がほぼ一定している点である。学校の検定英語教科書であれば，課が進むにつれて英文が徐々に長くなり，語彙と文法もしだいに高度になっていくのが原則であるが，平川の「英語会話」テキストにその傾向は見いだせない。英文の長さはほぼ一定で，語彙・文法のレベルも，NO. 1 と NO.54 に難易の差はほとんど見られない。

この点についてまずは英文の長さを見ていくと，テキストの総語数は 41,030 語となっている。週数は 212 週，話数は 211 話である。週数と話数が異なるのは，NO.28 の第 2 週と第 3 週の英文が一つの英文（499 語）になっているからである。そこで一話当たりではなく，一週当たりの英文の平均語数を算出すると 193.54 語となる。最大語数は NO.21-2「Baby Discussion “When We Grow Up”（赤ちゃん討論会「大きくなったら」）」の 296 語, 最小語数は NO.5-4「Father Comes Home（お父さんのお帰り）」の 129 語である。

語彙のレベルに関しては，大西（1950）が 30 冊のテキストを対象に，すでに分析を行っている。それによると，総語数は 21,540 語で，その中から異なる語だけを抽出すると，1,834 語であった。さらにそこから日本の地名・人名を除くと，1,721 語になる。この中で基本単語に当たる 600 語が全体の 90.8% を占めるという（大西 1950: 2）。つまり平川のテキストは基本単語 600 語でほぼ構成されているのである。

次に文法について見ると，関係代名詞 what や仮定法といった，高等学校で学習する文法項目が NO. 1 から登場している。英文を抜粋した上で横に文法項目を付す。

① That’s just what I want.（NO.1-2）　＜関係代名詞 what ＞
② Hasn’t Hanako come home yet?（No.1-3）　＜現在完了形＞
③ her class has bigger boys than mine.（No.1-3）　＜比較＞
④ I wish he would hurry up.（No.1-4）　＜仮定法＞
⑤ We’ve been waiting for you.（No.1-4）　＜現在完了進行形＞

これらの文法項目についての【活用】欄は以下のようになっている。

① what I want ＝私の欲するところ。私の要求。
（例）―Tell me what you want ＝御注文を聞かせて下さい。
② hasn’t ＝ has not の略形。
③ bigger ＝より大きい。
（例）―My apple is bigger than yours ＝私のリンゴは君のより大きい。
④ I wish…＝…と良いんだが。
（例）―I wish the rain would stop ＝雨が止むと…いいんだが。
⑤ we’ve ＝ we have の略形。

【活用】欄で示されるのは訳と例文であり，文法的な説明はいっさいない。②⑤の現在完了形と現在完了進行形に関しては，いずれも初出の文法事項であるにもかかわらず，それぞれの解説も，両者の違いの説明もない。全 54 号全体を見渡しても,【活用】欄における文法的説明は非常に少ない。平川は「赤ちゃんの口真似」を重視していたので，学校英語教育のような文法的説明は極力避けたのであろう[9]。

このような中で，聴取者の文法的な疑問の受け皿になったのが「質問箱」欄である。例えば,「Seeing Hollywood in Three Minutes（三分間でホリーウッド

見物)」(NO.20-4) という会話文では，Hollywood の様々な建物が紹介されるが，その中には関係副詞を使用した以下のような文が出てくる。

(1) That's the Greek Theater, where outdoor plays and concerts are held. (No.20-4)

(2) That's the famous planetarium where so many interesting things are shown about the moon and stars. (No.20-4)

この二つの英文について，平川はやはり文法的な説明を行っていない。これを受けて，NO.25 の「質問箱」欄には「前文の where の前にはコンマがあり，後の文の where の前には無いが，なぜですか」という質問が掲載されている。この質問に平川は以下のように答える。

> ここで(1)の場合は Greek Theater といっただけでは，それが何をする所かわからないので，特に説明を加える必要があることが考えられますね。そこでこの説明がはっきりわかる手伝いになるように，本文と説明をコンマで区切ってあるのです。ところが(2)の場合は planetarium（天文館）といえば，必然的にそこに何があるかは常識でわかっていることであり，特に説明はいらない位，天文館とその説明は結びついているわけです。そこでこの場合はコンマがない方が感じの上からもぴったりするでしょう。(NO.25)

この説明だけで(1)と(2)の文の違いを理解できた学習者は多くなかったと推測する。学校英文法において，(1)と(2)は関係詞の「制限用法と非制限用法」あるいは「限定用法と継続用法」と説明される文法事項である[10]。(2)の where の

前にコンマのついていない用法が「制限用法」や「限定用法」と呼ばれるもので,「候補がたくさんある名詞に限定を加える用法」と説明できる。famous planetarium といっても候補はいくつもあるから，where 以下で限定しているのである。一方,(1)の where の前にコンマのついた用法が「非制限用法」や「継続用法」と呼ばれるもので,「候補が定まった名詞に説明を加える用法」と説明できる。Greek Theater といえば候補は一つに定まるから，それがどんなものか補足説明をしているのである。

上記の記述から，文法的な理解については，ある程度，学校英語教育に依存する部分があったことが窺える。もちろん，平川も「質問箱」欄で頻繁に文法的質問を取り上げ，最大限の説明を試みているが，紙幅の都合もあり，説明が十分であったとは言い難い。文法事項の理解については，学校英語教育における基礎知識の有無に任されていた部分が少なからずあったと言える。

テキストの英語に関するもう一つの特徴は，スラングが複数含まれることである。一例を示すと，平川の会話文に繰り返し使われる表現に swell がある。この単語は動詞としては「膨らむ」「膨張する」という意味合いだが，口語では形容詞として「すばらしい」の意味で使われることがある。テキストからこの意味で使われた swell を抜粋すると以下のようになる。英文の右に付された訳とともに引用する。

| | |
|---|---|
| Oh, swell! Thanks. | ワー，嬉しい，有難う。(NO.7-4) |
| Well, isn't that swell! | ウン，それはよかったね。(NO.13-2) |
| Say, that's a swell idea! | まあすてき（NO.14-4) |
| That'll be swell. | だったら丁度いいや。(NO.23-2) |
| A swell idea! | うん，そいつはいいや。(NO.29-4) |

これらは平川がアメリカ西海岸で度々耳にした表現なのかもしれない。この表現が出てくる度ごとに平川は【活用】欄で「この swell は俗語であるから，未知の人などに向ってはつかわないこと」(NO.13-2) といった注意を繰り返している。この他にテキストで繰り返される表現としては，Darn it! (NO.5-3, NO.7-3, NO.7-4, NO.8-1, NO.14-1, NO.41-2) がある。これについても，平川は【活用】欄で「これは俗語の中でも上品な語ではない。但し打ちとけた会話では実際に使はれてゐる。強い感じを出す語であるから余り無闇に使はぬ方がよい」(NO.8-1) と注意を促す。

このようにスラングをテキストに含めると，とくに学校英語教育の関係者から批判されることは予想できたはずである。それでも平川がスラングをテキストに入れ続けたのはなぜなのだろうか。この問いについて，鍵となりうる言葉が「生きた言葉」である。平川はインタビューの中で次のように発言している。

> 「デパートで」とか「郵便局で」といった題材でも，無味乾燥な場面に会話をのせていって，技術的に英語そのものを教えることはできるでしょう。しかし，それは英語の＜いのち＞を教えることにはなりません。英語は＜いのち＞を植えつけておかないと成長していきません。生命のないいわば「死んだ言葉」をいくら教えても，それはその場限りのものとなり，忘れられたり棄てられてしまいがちです。わたしは「死んだ言葉」には興味もなく，価値も認めませんでした。「生きた言葉」には多少の不備はあっても，＜いのち＞が流れていますから育っていきます。ですから，わたしは一貫して，このような英語の＜いのち＞を忘れないような題材とその運び方をできるだけテキストの内容にもりこむという方針・目標を持っていました。(竹前 2002: 379)

ここで平川のいう「生きた言葉」とは日常生活に根差した言葉のことだろう。平川は19年間のアメリカ生活の中で，実際の会話には多数のスラングが含まれていることを知っていた。日本人向けのテキストだからといって，スラングを除去してしまっては,「生きた言葉」ではなくなってしまう。そのように考え,批判は覚悟の上で，あえてスラングをテキストに含めたものと考えることができる。このような「生きた言葉」のやりとりこそが,「ハウ・ツーでない会話番組」という要望に対する平川の答えだったのである[11]。

### ３．２．３　反響

平川の「英語会話」はたちまち大きな反響を呼んだ。それは,「最盛期には総聴取世帯数が約570万戸，聴取率は22.4％にも上り，テキストの発行部数は50万部に達した」(藤本 2021: 84）と言われている。この「総聴取世帯数」という記述は誤解を招く表現で，日本放送協会（1949）や竹前（2002）と照らし合わせると,「英語会話」の総聴取世帯数ではなく，ラジオの総聴取世帯数のことを意味する。つまり，570万に0.224を掛けた約128万が推計聴取世帯数となる。放送開始の18時はちょうど夕食の時間にあたり，ラジオの前に集まった一家も少なくなかったことから，聴取者は128万人よりも多かったと推定される。平川のもとには毎日，聴取者から手紙が届き，次男の洌によると,「『カムカム英語』を担当していた９年６ヵ月（民放も含めて）のあいだ，じつに50万通ものファンレターが放送局に届けられました」(平川 2021b: 313）ということである。

このような人気から生まれたのが聴取者のファンクラブ「カムカム･クラブ」である。そのきっかけになったのは，1947年4月29日，東京・神田の共立講堂において平川が開催した「楽しく英語を学ぶ会」であった。この会には全国から4,500人のファンが参加した（平川 2021a: 112)。これを機に全国に「カ

ムカム・クラブ」が結成されることになり，NHKの調査では最盛期には1,000もの支部があったとされている（平川2021b: 224）。

では，具体的に聴取者からどのような声があったのだろうか。放送開始後1年の時点で，例えば，福岡県の男性は,「先日英語の先生から『君の英語は発音が非常に正確だ』と言はれましたので,『僕毎晩カムカムの遊びをしてゐるんです』と言ひますと,『道理でだ』と言はれました。近く毎日新聞の主催で全九州学生英語弁論大会が開かれますが，私はその候補として選ばれました」（平川2021a: 102）と報告している。また，広島県の男性は,「昨日或る人に向かって進駐軍の兵隊さんが,『此処から道後山の駅までどの位かかるかね』と尋ねますと，その人は真っ赤な顔をしてコソコソ逃げて行きました。そこで私が行ってお答えすると大変喜ばれ，五, 六人の兵隊さんに取り巻かれて色々と質問を受け，とても愉快にお話しする事が出来ました」と感謝の意を伝えている（平川2021a: 102）。

反響は聴取者だけでなく，番組の評判を聞きつけた進駐軍にも及んだ。平川は日本を占領する進駐軍にとって願ってもない存在であり，アメリカの雑誌『ニューヨーク･タイムズ･マガジン』でも紹介された。その記事を書いたケン･カンターは以下のように平川を評価する。

> 平川唯一氏は，英会話を教えることを通して，幾百万人もの日本人に，微妙なアメリカーナの醍醐味を味わわせてくれる。これは多くの占領軍関係者および日本政府の役人が多くの日時を費やしてもできない仕事である。彼は，まさにデモクラシーの善意の伝道者であり，第一級のアメリカ合衆国広報担当官の代表である。（竹前2002: 387）

もちろん当時，アメリカ文化を紹介したのは「英語会話」だけではない。次

節で見る当時の英語教科書もまた，学習者がアメリカ文化の一端に触れる機会を与えた。上にある民主主義の理解ということに関しては，社会科教師たちも大きな役割を果たしただろう。このような状況の中で，19 年間，アメリカで生活し，その民主主義を体感した平川は稀有な存在であった。その平川の言葉に 100 万人を超える聴取者が高い意欲を持って耳を傾けた，という点に平川「英語会話」の意義がある。

### ３．３　平川唯一「英語会話」の背景―戦後まもなくの英語教育

では，このような「英語会話」流行の背景には，どのような状況があったのだろうか。まず見逃すことができないのは，戦後まもなくの「英会話ブーム」である。このブームの象徴的出来事としては『日米会話手帳』の売れ行きが挙げられる。同書は本というより 32 頁の小冊子であったが，1945 年 9 月 15 日に発売されるや否や，爆発的な売れ行きを見せ，発行部数は 360 万部にも上った（小川 1992）。

このブームをもたらしたのは進駐軍の存在である。当時，東京高等師範学校教授であった黒田巍は，「終戦後，アメリカの兵隊さんが大ぜい進駐してきまして，日本人みんなが英語が必要だということを感じ出して，たいへんな英語ブームが発生しました」（黒田 1967: 24）と述べている。また当時，東京外国語学校（後の東京外国語大学）教授であった小川芳男は，「進駐軍が巷にあふれていてどこにいっても米兵に会うものだから，英単語の一つも知らなくてはどうしようもない時代だった」（小川 1979: 153）と振り返っている。

しかし，これはいずれも東京の話である。GHQ 本部のあった東京にアメリカ兵があふれていたのは想像できるが，地方の場合，どのくらいの数のアメリカ兵がいたのだろうか。そのことを示すのが江藤淳『占領史録（下）』（1995）である。この中から，1946 年 2 月 13 日における連合軍の進駐状況を示すと以

下のようになる。1946 年２月は平川の「英語会話」が始まった月でもある。

| 府県名 | 進駐兵力 | 府県名 | 進駐兵力 | 府県名 | 進駐兵力 |
|---|---|---|---|---|---|
| 北海道 | 20,241 | 山梨 | 1,413 | 岡山 | 4,510 |
| 青森 | 8,514 | 静岡 | 3,425 | 広島 | 19,000 |
| 岩手 | 2,932 | 愛知 | 24,931 | 山口 | 4,451 |
| 宮城 | 10,095 | 三重 | 402 | 香川 | 1,200 |
| 秋田 | 1,650 | 岐阜 | 11,150 | 愛媛 | 8,400 |
| 山形 | 1,550 | 富山 | 120 | 徳島 | —— |
| 福島 | 6,345 | 石川 | 417 | 高知 | 2,325 |
| 茨城 | 1,670 | 福井 | 310 | 福岡 | 28,635 |
| 栃木 | 6,000 | 滋賀 | 1,232 | 佐賀 | 633 |
| 群馬 | 4,312 | 京都 | 5,611 | 長崎 | 26,414 |
| 埼玉 | 22,162 | 奈良 | 3,500 | 大分 | 2,032 |
| 千葉 | 2,406 | 和歌山 | 6,700 | 熊本 | 1,880 |
| 東京 | 45,794 | 大阪 | 11,637 | 宮崎 | 2,483 |
| 神奈川 | 85,393 | 兵庫 | 17,229 | 鹿児島 | 3,795 |
| 新潟 | 2,570 | 鳥取 | 220 | | |
| 長野 | 1,030 | 島根 | 943 | 合計 | 417,662 |

**表４　1946 年２月 13 日の進駐状況（江藤 1995: 440-441）**

上記の資料によると，日本全国に進駐したアメリカ兵は合計で約 42 万人，東京都は約４万６千人である。地方については，例えば，北海道が約２万人，宮城県が約１万人，長野県が約１千人，福岡県が約２万９千人となっている。もちろん，各都道府県のすべての都市にアメリカ兵がいたというわけではない[12]。竹前栄治『占領戦後史』(2002) を参照すると,「連合国軍進駐所在地」となった都市の多くは現在，各都道府県の中心都市となっている街である。しかし，逆に言うと，少なくとも各都道府県の主要都市においては，一定数のアメリカ兵が行き交っていたことを江藤（1995）は示唆している。

この状況を前に，当時の学習者はどのような意識を持っていたのだろうか。

そのことを窺わせる，ある高校生の投書が『読売報知』1945 年 9 月 23 日朝刊に掲載された。内容は以下のようになっている。

> われわれの生活に今日ほど英会話が必要になった時代はない。一歩戸外に出れば一人一人が外交官として米人に接触せねばならない。内に外にあらゆる接触の機会において学徒の英語力が極力利用されて然るべきであろう。
>
> しかしながら由来英語が学校教育において，相当重要視されておりながら大学を出た人でさえ満足に話せない実情である。話すということが語学の最も初歩であり，会話がその一大部門でありながら，今日会話を十分に課している学校はほとんどない。(中略)
>
> われわれの生活における英語の重要性ということはその必要部門を変えた。われわれは単に原書を読むばかりでなく十分に話せねばならない。(中略）今までの英語教育に対して深き反省をする時だと思う。(『読売報知』1945 年 9 月 23 日朝刊)

この高校生もやはり「今日ほど英会話が必要になった時代はない」という認識を示している。そして批判の矛先は学校英語教育に向かい,「今日会話を十分に課している学校はほとんどない」と断ずる。そして,「今までの英語教育に対して深き反省をする時だと思う」と締めくくっている。

高校生に批判された当時の学校英語教育はどのようなものだったのだろうか。戦後の学校英語教育の特徴は，およそ 10 年に一度改訂される「学習指導要領」によって規定されるようになったことである。戦後最初の学習指導要領は 1947（昭和 22）年に告示されたものであり，そこで示された英語科の目標は以下のようになっている。

一．英語で考える習慣を作ること。

二．英語の聴き方と話し方とを学ぶこと。

三．英語の読み方と書き方とを学ぶこと。

四．英語を話す国民について知ること，特に，その風俗習慣および日常生活について知ること。

この目標にはたしかに「話し方」も含まれており，決して会話を軽視しているわけではないことがわかる。そこで次に参照したいのは，当時の英語教科書である。上記の学習指導要領を受け，編集された中学校英語教科書に *Jack and Betty*（全３巻，1948）がある。この教科書は圧倒的な採択率を誇り，1949 年度から全国８割余りの中学校で使用された（稲村 1986: 150）。以下に示したのは中学２年生が使用する第２巻の改訂版である。

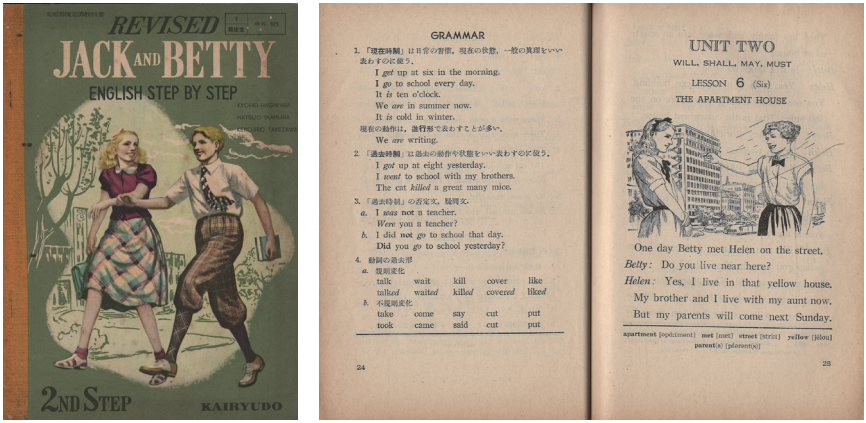



図５　*Revised Jack and Betty*（1953）

この教科書はアメリカの中学生である Jack と Betty の日常を描いたものと

なっている。編集方針については，著作者の稲村松雄が「聴き方・話し方を重視する方針に基づいて，全3巻を通じて会話の部分をなるべく多くする」(稲村 1986: 114）と述べており，実際に教科書を見ていくと，第1巻から多くの会話文が収録されている。このことから学習指導要領だけでなく教科書においても，学校英語教育は会話を軽視しているわけではないことが窺える。

そこでさらに参照したいのは，戦後の英語教師たちに指針を与えたといわれる『新英語教育講座』(全11巻，1948-1959）である。これは当時を代表する英語教育研究者たちが執筆したものであり，同講座の中で英語科教育の目標について記したのは石橋幸太郎である。石橋は東京高等師範学校における岡倉の教え子で，1923年に同校を卒業後，中学校の英語教員となり，戦後は東京高等師範学校教授を長く務めた（宇賀治 1980: 564)。その石橋は英語科教育の目標を以下のように記している。

> 普通教育における英語教授窮極の目的は，読書力の養成にあると信じる。目ざす目標が読書力の養成であるとすれば，始めから読書練習ばかりやつて居ればよさそうであるが，そう簡単には決められない。後で，も少し詳しく説明するが，言葉といふものの性質上 written language（文字言語）に上達するためには，spoken language（音声言語）から出発しなければならない。(石橋 1948: 78)

ここで石橋は英語科教育の目標を「読書力の養成」であるとしている。この「読書力の養成」というのは，岡倉由三郎が戦前を代表する著書『英語教育』(1911）の中で示した目標である。岡倉は同書の中で，「英語教授の目的たる実用的方面は果して如何なるものかと言うと，これに対しては自分は猶予なく読書力の養成と言う事を以て答えるのである」(岡倉 1911: 41）と述べており，この考えは

一般的な日本人が英米人と話す機会が稀であった当時，広く受け入れられた。そしてこの目標は主に岡倉の弟子たちを通して，戦後も受け継がれていたのである。

このように,「読書力の養成」を目標とする英語教師が数多く存在する中で登場したのが，平川唯一であった。「英語会話」が流行した背景には以上のような状況があった。

### 3．4　平川唯一「英語会話」が流行した理由

前節までの記述から，平川唯一の「英語会話」が流行した理由を以下の四点にまとめた。

⑴　人々の「英語が必要」という認識
⑵　平川の明るい人柄・番組の親しみやすい雰囲気
⑶　「赤ちゃんが口真似をするように」というシンプルな方法論
⑷　日本家庭を舞台にした会話

順に説明をしていくと，最初に指摘できるのは「英語が必要」という人々の認識である。街をアメリカ兵が闊歩する状況の中で，英語の必要性を感じた日本人は一定数いたことが前節までの資料から窺える。これは GHQ 本部のあった東京だけではなく，進駐軍の存在する地方の主要都市でも起こった現象であることを江藤（1995）は示唆している。

このような時代背景があった上で重要なのは，平川の人柄，方法論，そしてテキストである。上述したように,「日本を明るくしたい」という気持ちを強く持っていた平川はテーマソングに「証城寺の狸囃子」を採用し，明るく親しみやすい口調で語りかけた。その方法論はシンプルで,「赤ちゃんが口真似をする

ように」というものであった。これは「読書力の養成」を目標に据えた学校英語教育には乏しい要素であり，平川の「赤ちゃん」たちはラジオの前で大きな声を出した。テキストに記されたのは，慣れ親しんだ日本家庭であり，周りの事物がどのような英語で表現できるか知るのは新鮮であった。また同時に，19年間，アメリカで暮らした平川の口から語られる英米人は,「鬼畜」とは程遠いものであり，その生活は日本にはない慣習や豊かさにあふれていた。このようにして平川の「英語会話」は流行したのである。

### ３．５　平川唯一「英語会話」への批判

平川の「英語会話」は流行する一方で，批判も多くあった。これまでに指摘されている中で主なものを挙げると，以下のようになる。

⑴ 「赤ちゃんの口真似」という方法論は母語獲得と第二言語習得を混同している
⑵ 「英語学習はただ楽しいもの」という誤解を増長している
⑶ 聴取者の英語力はあまり向上していない
⑷ 日本人同士が英語を話す状況設定は不自然である
⑸ 語彙・文法の提示順序に対する配慮が不十分である
⑹ テキストの英語が簡単すぎる
⑺ テキストにスラングが多い
⑻ 発音のカタカナ表記はよくない

⑷から⑻の状況設定，提示順序，平易な英語，スラング，カタカナ表記，の五点についてはすでに３．２．２節で言及しているので割愛し，本節では⑴から⑶の三点について取り上げたい[13]。まず⑴について示唆しているのは富岡多恵

子である。富岡は,「平川氏の持論たる,外国語学習の赤ちゃん説は,一日にたった 15 分では，赤ちゃんに英語というコトバの環境をつくるには短すぎた。(中略）赤ちゃんたちが現在どのように，役に立つ英語を喋るかは興味のあるところだ」(富岡 1983: 90）と述べているが，これは現代の英語教育学に照らし合わせて重要な指摘である。

英語教育学において，赤ちゃんが母語として英語を習得する過程は「母語獲得」の領域に属する。「母語獲得」においては膨大な量の英語のインプットがある。一方,外国人学習者が外国語として英語を習得する過程は「第二言語習得」の領域に属する。「第二言語習得」の環境は様々であるが，日本のように教室を一歩出ると，英語を使用する人がほとんどいない環境では，英語のインプットはきわめて少ない。以上のことより，現代の英語教育学において,「母語獲得」と「第二言語習得」を混同してはいけない，というのは常識となっている。

繰り返しになるが，赤ちゃんの英語習得で何より重要なのは「インプットの量」である。平川が英語学習を開始したとき，年齢的には赤ちゃんではなかったが，19 年間，アメリカで生活し，膨大な量のインプットを受けることを通して英語を習得した。その膨大なインプット下での「赤ちゃん経験」を，１日たった 15 分の「英語会話」の時間に持ち込むのはそもそも無理がある，という批判はもっともなものである。

この「赤ちゃんの口真似」方式は英語を学ぶことが楽しいものであることを強調した方法論だが，そこで⑵の問題が発生してくる。⑵について指摘しているのは宇佐美昇三である。宇佐美は,「〔ある人が〕『平川英語の結果，英語学習とは楽しいものという誤解が生まれ，学習者が文法や語彙の増強といった地味な努力を怠るようになった』と述べたのを耳にしたこともある」(宇佐美 1982: 101）と述べている。たしかに，平川の明るい性格と巧みな話術をもってすれば,「英語会話」の時間は楽しいものであっただろう。しかしその後は，学習者

が自ら，地道なインプットを積み重ねていくことが重要になる。「英語会話」の楽しさに慣れ，自ら単語・文法・発音等のインプットを行うことを怠るようになってしまったとしたら，残念なことである。

⑵の問題は，⑶の「楽しいのはわかるが，結局，英語力は向上したのか」という疑問につながっていく。この点について黒田巍は,「この放送を用いてそれで英語が上達したかは疑問で,〔上達した人は〕きわめて少なかっただろうと思います」(黒田 1967: 14）と述べている。福田昇八も同意見で,「実際，あの番組を聞いて英語が話せるようになったという人はごく僅かであろう。十人に一人いない。おそらく百人に何人かがいいところであったろう」(福田 1991: 50）と推測している。

１節で述べたように，この点について現在，検証することは難しい。３．２．２節における分析に基づき，一つ言えることは，テキストには発信を前提とした様々な工夫が施されており，英語学習の足掛かりとしては十分な内容であったということである。テキストの英語を講師の流暢な発音に合わせて何度も繰り返し口にするという経験は，学習者にとって重要な経験である。その機会を与えた点に「英語会話」の価値を認めることができる。

では，平川のテキストと比べたとき，後の「英語会話」テキストはどのような類似点・相違点を有するだろうか。次節で見ていこう。

## ４．平川唯一以後の「英語会話」テキスト

本節では平川唯一以後の「英語会話」テキストについて，主に構成という観点から分析を行いたい。平川（2021a）に付された「NHK ラジオ英語講座略年表」によると，1951 年に平川が退任した「英語会話」は 1992 年に「英会話」

と改称されるまで続いた。以下では1951年から1991年までの40年間について，およそ10年ごとに「英語会話」テキストの変遷をたどり，平川のテキストとの類似点・相違点を概観する[14]。最初に挙げるのは松本亨『英語会話』1951年６月号（第６巻第３号）である。

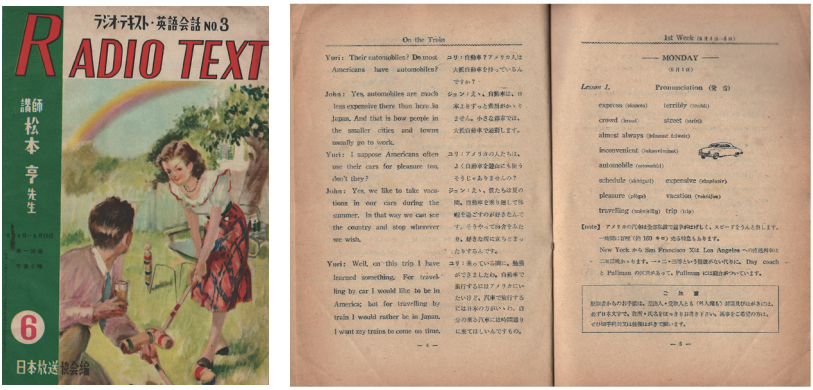



図６　松本亨『英語会話』1951年６月号（第６巻第３号）

松本亨は平川の後任にあたる人物で，1951年４月から1972年３月までの20年間,「英語会話」を担当した後，1972年度も土曜日のみ講座を受け持った。『英語会話』1951年６月号を見ると，最初に「第１週の英文全文＋訳」が来る構成に変わりはない。小さな変化は英文全文の前に，英語と日本語でリード文がついていることである。第１週の場合，日本語のリード文は「ジョンとユリと次郎は横浜駅に来て切符を買い，プラットフォームで電車を待っています」となっている。状況の説明なしに本文に入る平川のテキストよりも，わかりやすい導入になっている。

大きな変化が生じているのは，各曜日の頁である。月曜日の頁を見ると，そこには月曜日の英文が抜粋されるのではなく,「Pronunciation（発音）」という項目が来ている。この項目では英文から複数の単語が抜粋され，横には発音記

号が記されている。その下には【note】という欄がある。これは平川の【活用】欄と同じく語注にあたるもので，英文の中からいくつかの単語に説明が付されている。

続いて火曜日の見出しは「Expressions（言い表し方）」となっている。この欄では On their way to work や During the summer など，他の場面でも応用可能な表現を本文から抜粋している。水曜日の見出しは「Sentence Construction（文章の作り方）」である。ここでは形容詞を含む例文を与え，比較級を使った文に書き換えさせている。木曜日の見出しは「The Train Language（汽車の言葉）」である。この欄では，英文が電車に関する内容であったことから，汽車でよく使う英語を取り上げている。金曜日の見出しは再び「Sentence Construction」で，今度は動詞を与えて現在完了の文を作らせている。

以上のように，松本のテキストは一週間の英文に対して，各曜日で異なった項目を取り上げ，本文の理解を深めるという形式を取っている。テキスト全体を眺めると，項目として頻出するのは，上で挙げた「Pronunciation」「Expressions」「Sentence Construction」の三つである。

次に掲げるのは松本亨『英語会話』1961 年 11 月号（第 16 巻第 11 号）である。

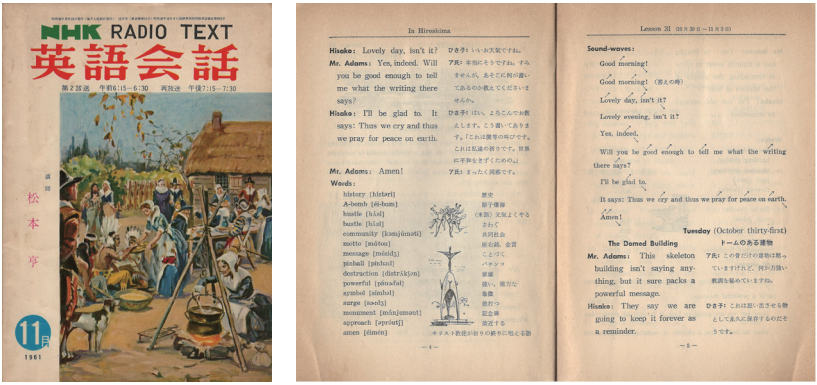



**図 7　松本亨『英語会話』1961 年 11 月号（第 16 巻第 11 号）**

この号ではまず「第１週の英文全文＋訳」が示された後,「Words」という見出しがある。これは本文中の単語に発音記号と意味を付した欄となっている。1951 年のテキストになかった要素は，それに続く「Sound-waves」という欄である。この欄では本文中の表現を句または文の単位で抜粋し，上昇の矢印と下降の矢印を用いて，イントネーションを指示している。このような音声面の新しい要素はあるが，基本的な構成は 1951 年のテキストと大きく変わらない。

続いて取り上げるのは東後勝明『英語会話』1973 年 4 月号（第 29 巻第 1 号）である。東後勝明は松本の後任で，1972 年 4 月から講座を担当した。1972 年度は月曜日から金曜日までを東後が，土曜日を松本が担当したが，1973 年度からは全曜日を東後が一人で担当することになった。あえて 1973 年度のテキストを掲載したのは，この年度から東後の特徴が表れ始めると考えたからである。

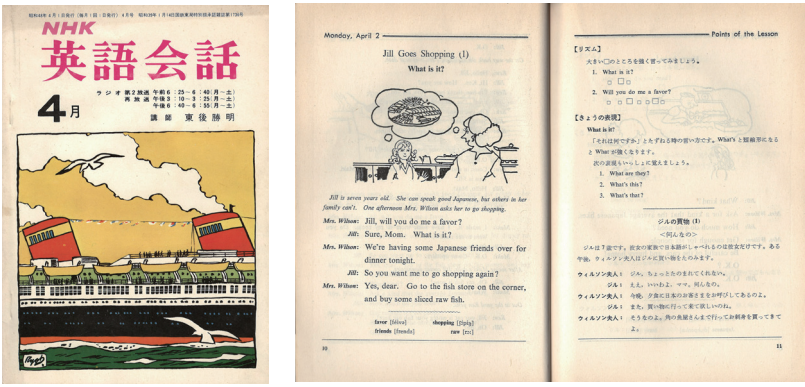



**図 8　東後勝明『英語会話』1973 年 4 月号（第 29 巻第 1 号）**

上の図からも明らかなように，東後のテキストは松本のものよりもすっきりした印象を与える。それは単語と発音記号を脚注のような形で，週ごとの英文の下に配置し，右の頁を「リズム」と「きょうの表現」という欄に限ったか

らだろう。この構成は東後勝明『英語会話』1981 年 2 月号（第 36 巻第 11 号）でも変わらない。この号では「リズム」の欄が「音声のポイント」という欄になっている。

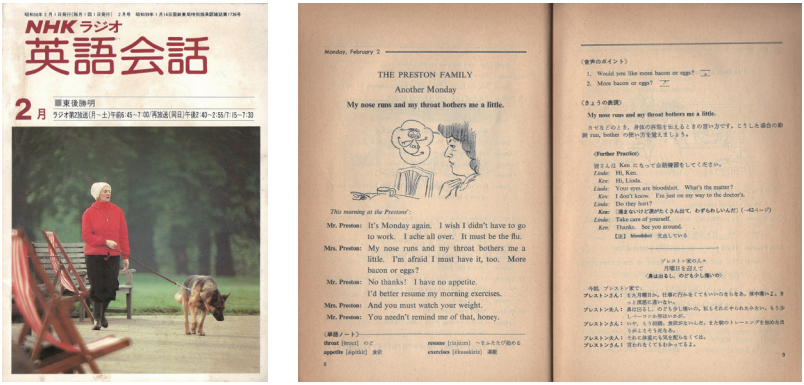



**図 9　東後勝明『英語会話』1981 年 2 月号（第 36 巻第 11 号）**

一つの変化は「きょうの表現」欄の下に「Further Practice」という欄が設置されたことである。この欄では本文とは別に簡単な会話文が与えてあり，会話練習をするよう指示している。第 1 週の場合，Ken と Linda による 8 行の会話文があり,「皆さんは Ken になって会話練習をしてください」という指示が冒頭にある。英文の途中には〔痛まないけど涙がたくさん出て，わずらわしいんだ〕という日本語が混ざっている。これは英訳することを求めるものである。

続いて挙げたのは大杉正明『英語会話』1991 年 7 月号（第 47 巻第 4 号）である。大杉は 1987 年 4 月から 1992 年 3 月まで「英語会話」を担当し，1992 年 4 月からは後継番組である「英会話」を担当した。上のテキストの特徴は，東後の時代に「Further Practice」という名称であった欄が「Practice」という名称になってスペースを拡張し，右の頁の大半を占めるようになっていることである。

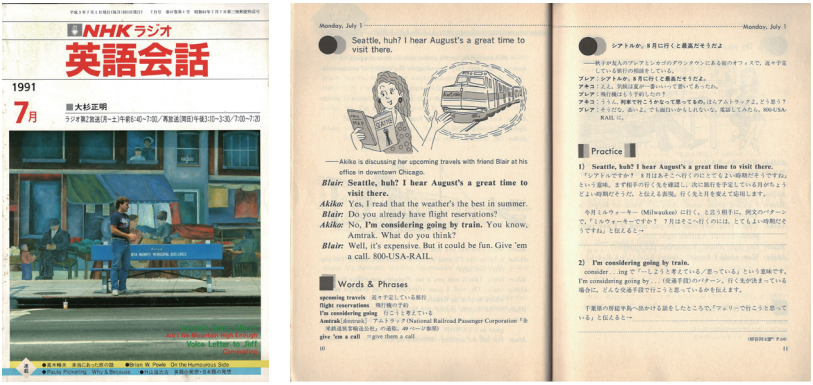



図 10　大杉正明『英語会話』1991 年 7 月号（第 47 巻第 4 号）

内容としては，まず本文から I’m considering going by train. という英文が抜粋される。これに対して,「consider…ing で『…しようと考えている／思っている』という意味です。I’m considering going by…（交通手段）のパターン。行く先が決まっている場合に，どんな交通手段で行こうと思っているかを伝えます」という説明がなされた後,「千葉県の房総半島へ出かける話をしたところで,『フェリーで行こうと思っている』と伝えると」という状況設定を提示し，文を作ることを求めている。

1970 年代以降の「Practice」欄の登場と拡張は，学習指導要領における「言語活動」の影響を受けたものと考えられる。1969・70 年告示の学習指導要領ではこの「言語活動」の設定が一つの柱となった。例えば，高等学校学習指導要領解説には「言語活動」について以下のような説明が見られる。

> 音声や文型など言語の部分的な練習のみにとどめておいては，じゅうぶんではなく，外国語を理解し表現することができるようにさせるためには，音声や文型や文法事項なども含め，言語を総合的に理解したり表現したり

する活動を行なわせる必要があり,「言語活動」が示されたのである。(文部省 1972: 3)

この「言語活動」の設定は当時の英語教育において大きな課題となり，授業にどのように取り入れるかが議論された[15]。今日の英語教室において活動は普通に行われていることであるが，この活動という概念が広まり始めたのは1970年代以降のことである。

以上からテキストの変遷についてまとめると，次のようなことが言える。それは，テキストの構成は３．２．２節で示したものと基本的に変わらないが，いくつか新しい要素が加わっている，ということである。本節で示した新しい要素とは,発音記号(図６，７，８，９,10)やリズム･イントネーション(図７，８，９）などの音声面の情報と，テキストの内容に関連したPractice（図９，10）などの活動である。このように,「英語会話」テキストは1951年以降も時代の動向に合わせて，新しい要素を取り入れたが，その構成については平川のテキストを踏襲しているように見受けられるのである。

## ５．おわりに

本論文の目的は全54号の平川唯一「英語会話」テキストを分析することであった。今回，明らかになった事柄は主に二つある。

一つは３．２．２節で分析対象とした，テキストの構成，内容，英語の特徴である。テキストの構成とは，最初に「第１週の英文全文＋訳」，次に「月曜日の英文＋【活用】」が続き，それを火水木金と繰り返した後，第２週以降は第１週の繰り返しとなる構成である。テキストの内容については，英文の内容と

【活用】の内容の二つに分けて分析を行った。前者については，全 211 話のうち 188 が日本人同士の会話である点などを明らかにした。後者については，同じ説明を複数回繰り返すことで学習事項の定着を図っている点，文法的な説明がほとんどない点などを指摘した。さらに，英語の特徴としては，難易度がほぼ一定であるということに注目し，一週当たりの平均語数が 193.54 語となる点, NO. 1 から関係代名詞 what や仮定法が登場する点などを提示した。同時に，スラングが複数見られるということに着目し，swell という単語を例に挙げた。以上の事柄は今後の基礎研究資料となりうるものである。

もう一つは 4 節で示した，後の「英語会話」テキストとの類似点・相違点である。平川以降のテキストを概観すると，音声面の情報や活動が追加され，より教育的になってはいるが，３．２．２節で提示したテキストの構成は，基本的に変わっていないことが明らかになった。上記の構成は当然のもののように見えるかもしれないが，例えば，二週間や一ヶ月かけて一つの英文を学習する，あるいは，曜日ごとに異なった英文を学習するなど，他の選択肢もありえたはずである。その中で平川が選び取った構成は，後の「英語会話」テキストに踏襲されたものと見られる。

最後に今後の課題について述べたい。それは「英語会話」テキストのさらなる分析である。この分析は平川以前のテキスト分析，平川のテキスト分析，平川以後のテキスト分析，の三つに分けることができる。今回，平川のテキスト分析についてはある程度の貢献を果たしたが，残る二つについては考察が十分とは言い難い。

平川以前の「英語会話講座」テキストについては, 先行研究として山口 (2001) があるため，今回分析の対象にしなかった。山口は戦前の「英語会話講座」について,「発音練習も文法解説もなく，ただ出演者の個人的な『おしゃべり』を聴かせ続けた年もあれば，基本的な英単語だけを使いながらも興味深い展開の

ストーリーを聴かせる連続英語劇が放送された年もあった。英語教育の観点から見れば，こうした不揃いで場当たり的にもみえる『英語会話』の放送は問題点が多いかもしれない」(山口 2001: 141-142）と述べている。仮に「不揃いで場当たり的」であったとしても，平川のテキストとどのような類似点・相違点があるかについては今後，検討が必要である。

一方，平川以後の「英語会話」については，40 年分の時間的厚みが存在する。今回はおよそ 10 年に一度の定点観測のような形で済ませたが，最終的には 40 年間の全テキストを対象に分析を行う必要がある。本論文で比較の対象とした構成以外の点，とくに英文の難易度や話題，語彙や文法事項の配列など，検討を要する事柄は多数ある。本論文を出発点として，さらに研究を深めていきたい。

（まさき　たかゆき・北海学園大学経済学部准教授）

［注］

1　政治学の分野における歴史的研究としては竹前（2002）がある。

2　これまでに確認できた限りでは，武市（2015）が松本亨のテキストと平川のテキストを比較している。ただし，同書は松本に関する研究なので，平川のテキストについての考察は十分ではない。

3　斎藤（2019）は教育成果を判定することの難しさを指摘している。

4　山口（2001）は 1934 年に放送された「夏期英語講座」が「英語会話講座」と同質であることを指摘している。ただ，あくまで名称は「夏期英語講座」であることから，本論文では 1935 年を「英語会話講座」の開始とした。

5　NO. 2，NO. 3，NO. 4，NO. 5，NO.28 の 5 号はこの例外である。NO. 2 から NO. 5 については，NO. 2 に第 1 週と第 2 週の英文，NO. 3 に第 3 週と第 4 週の英文，NO. 4 に第 1 週と第 2 週の英文，NO. 5 に第 3 週と第 4 週の英文が収録される, という形になっている。NO.28 は第 2 週と第 3 週の英文が一つの英文になっている。

6　全 54 号の収録された平川・日本放送協会（1986）の総目次を数えると，全 210 話になる。ただし，この総目次は NO.6-5「Evening Glow（夕やけ）」が抜け落ちている。したがって，合計話数は 211 となる。

7　9 つの内容を示すと，NO.3-3 が Toshio と American の会話，NO.10-1 が Kazuo と American の会話，NO.12-2 が Haruo と Soldier の会話，NO.12-4 が American と Takeo の会話，NO.18-1 が Fred と John の会話，NO.28-4 が再び Kazuo と American の会話，NO.32-2 が Mr. May と Saburo の会話，NO.34-1 が Ted と Jim の会話，NO.35-3 が Tom と Ben の会話，となっている。

8　teacher に関する記述は NO.45-3 の【活用】欄にも確認できる。そこでは「先生を直訳すると teacher であるが，日本語ではこれを敬称代名詞としてよく使うのに反して，英語では先生を呼ぶ場合はいつでも Mr.――，Miss.――，Mrs.――と言った呼び方をし，teacher という語は使わない」という記述になっている。

9　ただし文法的説明がまったくないわけではない。例えば，NO.32-3 には when he found he had lost his ball「彼がボールをなくしたのに気がついた時」という英文がある。これに対して，平川は【活用】欄で「この had lost というのは文法では過去完了，或いは大過去と言うが，それはどんなわけかと言うと，すなわちおじいちゃんが（気がついた）という過去の出来事がある以前に（なくした）という更に前の出来事があったわけで，この二つの出来事の時間的関係をはっきりさせるため

に英語では過去（found）と過去完了（had lost）との二つの形を使いわけるのである」と説明している。

10 『ロイヤル英文法』(綿貫他 2000）が「制限用法と非制限用法」,『総合英語 Forest』（石黒 2013）と『総合英語 Evergreen』(塙 2017）が「限定用法と継続用法」と記述している。『現代高等英文法』(八木 2021）では「限定用法と叙述用法」となっている。

11 「生きた言葉」という表現は『ラジオ年鑑』における番組の趣旨説明の中にも確認できる。そこには,「英語会話講座は,（中略）平川唯一氏により引きつづいて担当されており, 生きた言葉の理解を目的としている」(日本放送協会 1949: 48）とある。

12 例えば, 北海道の 1945 年 10 月 30 日における各都市の進駐状況は, 函館が 4,297 人, 小樽が 4,563 人，札幌が 5,616 人，旭川が 5,399 人，室蘭が 1,500 人，稚内が 200 人, 美幌が 300 人，帯広が 250 人，と記されている（毎日新聞社 1974: 84）。

13 ⑷⑸について指摘をしているのは五十嵐新次郎である。五十嵐は⑷の状況設定について,「日本人である太郎や花子に英語を喋らせて向うの事情を理解させようというのは無理である」(五十嵐 1948: 41）と述べている。⑸の語彙・文法の提示順序については,「系統的な配列もなく，段階もなく，学習者は，いつも同じところをどうどうめぐりしていては困る」(五十嵐 1948: 41）と指摘している。

⑹の平易な英語について言及しているのは丸山一郎である。丸山は平川に届いたファンレターの整理をした経験から,「複数の大学教授から『もっと難易度の高い，学問的に高度な英語を放送するべきだ』と何度も叱責のお手紙が届いていたのです」(平川 2021b: 249）と明かしている。

⑺⑻のスラングとカタカナ表記は，宇佐美昇三の指摘である。宇佐美は「発音をカナで表記したことや,（批判者のいう)『スラング』の使用も，音標文字信奉者や“格調ある英語”支持者からは攻撃された」(宇佐美 1982: 101）と振り返っている。

14 平川以後の「英語会話」講師たちがどのように英語を勉強したかについては，松本（1970)，東後（2002)，大杉（2017）を参照されたい。

15 学習指導要領を受け, 雑誌『英語教育』(大修館書店）は 1973 年 2 月号において「『言語活動』の進め方」という特集を組んでいる。

**［参考文献］**

朝日新聞社（編）(1995)『『日米会話手帳』はなぜ売れたか』朝日新聞社

五十嵐新次郎（1948)「平川氏の英語放送について」『Current of the World』第 25 巻第 2 号，p.41

石黒昭博（監修），塙タカユキ他（著）(2013)『総合英語 Forest 7th edition』桐原書店
石橋幸太郎（1948)「英語教授法大要」市河三喜（主幹)『新英語教育講座　第 1 巻』研究社，pp.69-205
稲村松雄（1986)『教科書中心 昭和英語教育史―英語教科書はどう変わったか』開隆堂出版
稲村松雄（1993)『ジャック・アンド・ベティーから 21 世紀へ』桐原書店
伊村元道（2003)『日本の英語教育 200 年』大修館書店
宇賀治正朋（1980)「石橋幸太郎先生小伝」『英語青年』第 125 巻第 12 号，p.564
宇佐美昇三（1980)「英語教育番組略史―大正 14 年から昭和 54 年まで」『NHK 放送文化研究年報』第 25 集，pp.339-426
宇佐美昇三（1982)「カムカム英語の輝き」『英語教師読本』アルク，pp.97-101
江藤淳（編）(1995)『占領史録（下)』講談社
江利川春雄（2016)『英語と日本軍―知られざる外国語教育史』NHK 出版
塙タカユキ（編著），川崎芳人他（著）(2017)『総合英語 Evergreen』いいずな書店
大杉正明（1991)『英語会話』第 47 巻第 4 号，日本放送出版協会
大杉正明（2017)『あじのひものとビーフステーキ―大杉正明の英語でこぼこの道』ディーエイチシー
大西雅雄（1950)『平川英語の研究』メトロ研究社
岡倉由三郎（1911)『英語教育』博文館
岡倉由三郎（1933)『春期 基礎英語』日本放送出版協会
小川菊松（1992)『出版興亡五十年』誠文堂新光社
小川芳男（1979)『私はこうして英語を学んだ』TBS ブリタニカ
紀平健一（1988)「戦後英語教育における Jack and Betty の位置」『日本英語教育史研究』第 3 巻，pp.169-205
紀平健一（1995)「『カムカム英語』―戦後『英会話』の原型」『日本英語教育史研究』第 10 巻，pp.111-141
黒田巍（1967)「私の英語教育史」『英語教育』第 15 巻第 12 号，pp.14-28
斎藤兆史（2007)『日本人と英語―もうひとつの英語百年史』研究社
斎藤兆史（2019)「英語教育の現状と課題」秋田喜代美･斎藤兆史･藤江康彦（編)『メタ言語能力を育てる文法授業―英語科と国語科の連携』ひつじ書房，pp.1-8
武市一成（2015)『松本亨と「英語で考える」―ラジオ英語会話と戦後民主主義』

彩流社
竹前栄治（2002）『占領戦後史』岩波書店
東後勝明（1973）『英語会話』第 29 巻第 1 号，日本放送出版協会
東後勝明（1981）『英語会話』第 36 巻第 11 号，日本放送出版協会
東後勝明（2002）『新版 英語ひとすじの道』筑摩書房
富岡多恵子（1983）『「英会話」私情』集英社
鳥飼玖美子（2011）「英語・愛憎の二百年」『NHK テレビテキスト 歴史は眠らない 2011 年 2 - 3 月』NHK 出版，pp.5-94
鳥飼玖美子（2021）『通訳者たちの見た戦後史―月面着陸から大学入試まで』新潮社
日本放送協会（編）（1949）『ラジオ年鑑　昭和 24 年版』日本放送出版協会
平川洌（1995）『カムカムエヴリバディ―平川唯一と「カムカム英語」の時代』日本放送出版協会
平川洌（2021a）『カムカムエヴリバディ―平川唯一と「ラジオ英語会話」の時代』NHK 出版
平川洌（2021b）『「カムカムエヴリバディ」の平川唯一―戦後日本をラジオ英語で明るくした人』PHP 研究所
平川唯一（1946）『英語会話』第 1 巻第 1 号，日本放送出版協会
平川唯一（1949）『英語会話』第 4 巻第 6 号，メトロ出版社
平川唯一（1979）「わたしのカムカム英語」NHK（編）『わたしの自叙伝⑴』日本放送出版協会，pp.167-186
平川唯一・日本放送協会（編）（1986）『カムカム英語』名著普及会
福田昇八（1981）「カムカム英語の特色」平川唯一『みんなのカムカム英語』毎日新聞社，pp.182-194
福田昇八（1986）「カムカム放送の意義」平川唯一・日本放送協会（編）『カムカム英語　別冊』名著普及会，pp.24-37
福田昇八（1991）『語学開国―英語教員再教育事業の 20 年』大修館書店
藤本有紀（著），NHK ドラマ制作班（編）（2021）『NHK ドラマ・ガイド　連続テレビ小説　カムカムエヴリバディ　Part1』NHK 出版
堀英四郎（1939）『春期 基礎英語』日本放送出版協会
毎日新聞社（編）（1974）『私たちの証言―北海道終戦史』毎日新聞社
松本亨（1951）『英語会話』第 6 巻第 3 号，メトロ出版社

松本亨（1961)『英語会話』第 16 巻第 11 号，日本放送出版協会
松本亨（1970)『英語と私　改訂版』英友社
文部省（1962)『日本の成長と教育―教育の展開と経済の発達』帝国地方行政学会
文部省（1972)『高等学校学習指導要領解説　外国語編』東京書籍
八木克正（2021)『現代高等英文法―学習文法から科学文法へ』開拓社
山口誠（2001)『英語講座の誕生―メディアと教養が出会う近代日本』講談社
山田豪（1997)「Jack and Betty の時代性をいかに評価するか―教科書としての内容検討を踏まえて」『日本英語教育史研究』第 12 巻，pp.65-99
渡部昇一（1980)「『カムカム英語』の名講師平川唯一健在なり」『文芸春秋』第 58 巻第 9 号，pp.155-157
綿貫陽・宮川幸久・須貝猛敏・高松尚弘（2000)『ロイヤル英文法　改訂新版』旺文社
『読売報知』1945 年 9 月 23 日朝刊

［謝辞］
本論文を執筆する上では，斎藤兆史氏，山内久明氏，鈴木哲平氏，城座沙蘭氏，青田庄真氏よりご助言をいただいた。ここに記して感謝の意を示したい。